

# くもべラボ 2021

人文地理学研究室  
(杉山 武志)

## 1. 概要

くもべラボは、2015年度より開始して7年が経過する、杉山ゼミの代表的プロジェクトの一つである。筆者（杉山）が創造都市／創造農村論を研究してきた経緯もあり、創造都市政策が推進されている丹波篠山市の東部地域をフィールドに教育研究と実践活動を続けている。くもべラボの活動目的は、人口減少や高齢化が顕著になってきている地域コミュニティとその生業を少しでも回復させていくための方策を、地元の皆さんと一緒に学びあう「集い」の提供にある。

くもべラボは旧雲部小学校の校舎を利活用してコミュニティビジネスを展開する合同会社里山工房くもべを中核的な連携先として、丹波篠山市東部6地区（日置、後川、雲部、福住、村雲、大芋の各地区）まで研究調査、実践活動のフィールドが広がっている。したがって、くもべラボには、①雲部地区のこと、②丹波篠山市東部地域全体のこと、双方のスケールでの取り組みが含まれる。

## 2. これまで

コロナ禍以前には、里山工房くもべのコミュニティビジネス活性化、東部6地区という近隣の再発見を促すまちあるきやワークショップを企画、実践してきた。他方、コロナ禍でも可能な活動として2020年度は、里山工房くもべと協働関係にあるくもべまちづくり協議会の活動のあり方を検討する委員会に参加し、まちづくり協議会のスリム化を前提とした組織再編、くもべまちづくり協議会（非営利組織）と里山工房くもべ（営利組織）との関係性のあり方、旧雲部小学校跡地活用の企画立案など支援を試みてきた。

スリム化検討の背景には、多自然居住地域をめぐるまちづくり協議会（地域運営組織）の存立基盤の脆弱性という課題がある。くもべまちづくり協議会においても設置後15年程度が経過したなか、組織の硬直化、担い手の高齢化、人材不足など深刻な問題が目立っていた。諸問題の改善策の提案に向けて、くもべまちづくり協議会が実施するアンケート調査をアシストしたのが2020年度であった。その甲斐もあり2021年度、くもべまちづくり協議会は新たな体制でリ・スタートした。あり方を検討する委員会でアンケート調査の取りまとめ役を担った杉山ゼミの花谷和志さんが当該調査結果を修士論文に記すなど、学術成果も得た。

## 3. これから

コロナパンデミックの終息が見通せないなかではあるが、手をこまねているわけにもいかないので、くもべラボでは2022年度より新たな活動を始める。なかでも、里山工房くもべとの連携を核とする丹波篠山市東部6地区協議会の新たな挑戦を後押しする活動を展開したい。

これまでの丹波篠山市東部6地区協議会では、東部6地区という近隣コミュニティの再発見に主眼が置かれてきた。一つの地区だけで凝り固まるのではなく、近隣を再発見して、ゆるやかにつながりあうなかで相互に助けあい、補完しあう精神の回復が目指されてきた。ただ、近隣コミュニティが連携しあう基盤が出来上がりつつあるものの、協議会設立から4年が経過し、70歳代を中心とする設立時メンバーの高齢問題が顕在化している。すなわち、次世代が主役の丹波篠山市東部6地区協議会の事業運営に転換させるための道筋を考える必要性が浮きぼりになってきた。

転換に向けた準備として2021年度は、兵庫県丹波県民局からの支援を受けながら、アドバイザーである石坂将一氏の参加のもと丹波篠山市東部6地区協議会のあり方について検討を重ねてきた。その結果（本稿執筆の2022年2月時点では未実施だが）、2022年3月に30～40歳代を中心とする10名の新メンバー（新事務局長、新アドバイザー、新委員）を加えたうえで、次世代が事業運営の中心となる新たなプロジェクトが協議会内に発足することになった。具体的内容は、3月以降に新メンバーで検討されることになっている。一方で、くもべラボの学生チームとしては、やや沈滞してしまっている丹波篠山市東部6地区協議会ホームページ「篠山暮人(くらうど)」を活かして、上述の若い世代の新たな試みや東部地域の魅力を発信する取材、記事の執筆などを手がけていく。

地域運営組織は、地区スケール、比較的広域なスケール、制度的・非制度的（任意）など多様な地理的範囲と形態が存在する。そうしたなか斯学では、地域運営組織の設立方法をめぐる話題が花盛りでもある。しかし、くもべラボでは、くもべまちづくり協議会の組織再編など先駆的な経験を経て、広域的地域運営組織の次世代承継（しかも、かなりの若手への承継）という全国でもほとんど類を見ない事業への支援を2022年度以降、研究調査と実践の両面から進める予定である。